Northwestern 大学での留学を通じて学んだことと今後の課題

東京慈恵会医科大学　産婦人科学講座
杉本　公平

２０１５年８月２４日から２０１５年１１月１４日までの約３か月間、米国シカゴの Northwestern 大学、Teresa K Woodruff 教授の the Woodruff lab へ留学してきたのでご報告申しあげます。

今回の私の留学の目的ですが、

・日本版の Decision Trees を作製すること
・がん・生殖医療における Psychosocial care 体制の実態調査

以上の２点でありました。
留学後、直ちに Woodruff 教授からはこの課題以外に、Decision Trees の論文と Oncofertility Consortium の Website の翻訳、そして、日本版の Decision Trees の作成を命じられました。Woodruff lab では月 1 回の教授との直接面接である Lab chat があり、それ以外でも毎週の全体ミーティング、そして、年 1 回のスタッフ全体の自己紹介を行う Woodruff lab summit があります。私の場合は、到着直後と 1 週間後に特別に個人ミーティングを行っていただきました。

Lab chat での Woodruff 教授

日本版の Decision Trees を作製してすぐに問題点に直面しました。卵子提供をはじめとする donation が日本産婦人科学会の会告で禁止されている現状では、がん・生殖医療の患者さん達にとってオプションが極めて少ないという点です。妊孕性温存療法が成功しなかったがん・生殖医療の患者さんが家族を持つ選択肢として特別養子縁組の比重はとても重た

いものとなります。私は特別養子縁組の現状について検索を始め、その厳しい現実を初めて知ることになりました。アメリカでは年間約 12 万件の特別養子縁組が行われていると推測されていますが、日本ではなんと 600 件程度しか行われていないのです。そして、アメリカの特別養子の縁組を扱う Agency には、がんサバイバーを養親として対象外にしているところもあることを知りました。Oncofertility Consortium の Patient Navigator である Kristin からは、「がんサバイバーを一切差別しないと誓っている Agency が数社あり、私はそこを紹介している。」とこちらの現状を聞きました。日本の Agency の現状についてはまだ知られていません。私は Woodruff 教授と話し合い、日本の特別養子縁組についてのアンケート調査を行うことにしました。特別養子縁組に関わっている団体、マス・メディアの方とコンタクトをとり情報を集める一方で養護施設の現状などもインターネットで調査しました。3 万人以上のお子さんが養護施設にいるにもかかわらず、特別養子縁組がなかなか進まない現状が明らかになりました。この現状を「Problem」という表現をした私に対して Woodruff 教授は「Problem という表現は過去のことを言っているので好きじゃないわ。現在のことは Opportunity というのよ。日本にはこんなにも多く子供達が養子縁組を待っているじゃないの。これは大きな Opportunity よ。」と表現されました。Woodruff 教授の講演は Youtube などでも見ることができますが、とても表現力が豊かで人の心を動かすプレゼンテーション能力の極めて高い方です。この言葉は私にとってとても印象的でありました。その後、成育医療センターの小泉智恵先生の多大なご援助のもとに、がん・生殖医療における特別養子縁組（donation にも少し言及しております）に対する、がんサバイバー、Agency、腫瘍医、生殖医療医向けのアンケートを完成することができました。現在、倫理委員会への書類の作成中であります。この結果に留意しながら Decision Trees の運用方法を検討していくべきであると考えております。そして、必要があれば他領域との学際的な協力関係のもとにがんサバイバーの方が家族を作る選択肢がより豊かになる社会作りに貢献していくべきであると考えております。

留学開始から 3 週間目に入った時に、最初に Woodruff 教授から与えられた課題を一通り消化しました。その時点である程度の信用を頂けたのか Oncofertility Consortium にかかわっている多くの方をご紹介いただきました。Oncofertility Consortium の中で Psychosocial care にかかわっている中心人物である心理士の Angela、Patient Navigator の Kristin、そして、生殖医療医の Dr. Robins、遺伝カウンセラーの Wicklund 准教授です。Wicklund 教授は多忙で都合がつかないとのことでしたが、代わりに Suzanne 准教授がインタビューを受けてくださいました。インタビューの調整のために、英文メールを送り続ける毎日でした。秘書の方が仲介になる場合も多く、さらに私の方も仲良くしている日本語に堪能な Northwestern 大学の学生である Jason 君に通訳をしてもらうように Woodruff 教授からアドバイスを受けておりましたので、全員のスケジュール調整に 1 日数時間を費やすことになりました。おかげさまでこの期間に英文メールに対する抵抗感がかなり少なくなりました。このインタビューを通じてようやく Oncofertility Consortium の

Psychosocial care 体制の全貌が見えて参りました。要点を説明しますと、腫瘍医は、妊孕性温存療法の適用が考えられる患者をまずは Patient Navigator の Kristin へ紹介します。そこで Kristin からがん・生殖医療の情報提供が行われます。彼女は最初の話は 1 時間程度で精神的ダメージを受けている患者さんに負担にならないように、あまり細かく話し過ぎないように心がけていると話してくれました。がん・生殖医療という複雑で、慣れたものでないと説明が困難である領域では、「まずはこの人に紹介すればいい」というターゲットがあることは、亀田総合病院の奈良先生がまさにそのターゲットになっていらっしゃり、そのことが情報提供から治療への流れをスムーズにしていることからも有用であると考えておりましたが、Oncofertility Consortium でも同様の効果があることを確認できました。Kristin は患者さんからの連絡がいつでも受けられるように 24 時間 365 日そのための携帯電話を肌身離さずにもっているようです。アメリカ大陸という広大な領域に患者さんが点在しているための措置と言えますが、現在 JSFP がすすめている県単位でのがん・生殖医療の拠点作りが進んでいき、その施設が彼女と同様の対応ができるような人材を確保できれば、個人への負担が集中しない体制で同様の患者さんへの支援体制ができるようになるのではないかと考えております。そのような人材教育を日本生殖心理学会と協力して行っていくことも我々の課題であると考えます。そして、心理支援の中心である心理士の Angela ですが、がん・生殖医療の患者さんには必ず一度面接を行い、必要に応じて適宜心理療法を施行しています。彼女はがん・生殖医療の患者さんのみならず、不妊症の患者さん全般を対象に心理支援を行っています。そこで大切になってくるのが Kristin との連携です。この二人はお互いにリスペクトしあいながら、緊密に連携をとっております。そして、毎週の生殖部門ディビジョン・ミーティングでは彼女達のみでなくスタッフ全員が平等に意見を出し合いながら患者さんのケアを心がけています。ファーストタッチでの Kristin からの情報提供を出発点として、医師、看護師が率直に平等に意見を言いながら心理部門の統括者である Angela が皆をコントロールして Psychosocial care 体制が運営されているという状況を学ぶことができました。この体制のさらに分析することにより普遍的な Psychosocial care 体制の確立を目指す研究案を小泉先生が作成されました。Woodruff 教授からも Agree を得ており、今後皆で協力してこの研究を支援していきたいと思っております。

Oncofertility Conference で研究について Woodruff 教授に説明する小泉智恵先生と杉本

留学の最終段階となる 11 月 3 日より 5 日まで Northwestern 大学におきまして、第 9 回の Oncofertility Conference が行われました。日本からは鈴木直理事長をはじめ、古井辰郎先生、高井泰先生、野木裕子先生、三善陽子先生、高江正道先生、小泉智恵先生、加藤淳子先生、白石絵莉子先生が参加されました。今回のメインテーマの一つとして「小児がんサバイバー」が取り上げられていました。さらに LGBT についても言及した内容があり、それを受容していく自分のコントロールの仕方を小泉先生に教わることができました。日本でも様々な形で取り上げられつつある問題ですが、専門家の話をまとめて聞くことができて貴重な体験となりました。非常にタイトなスケジュールであるにもかかわらず、Jet lug をものともせずに真剣に聞き入られている先生方の姿勢に大変感銘を受けました。講演終了後はシカゴのレストランにおいて日本人参加者皆で食事をして親睦を深めることができ、がん・生殖医療の今後の発展に向けて皆の結束感を高めることができました。

Oncofertility Conference 後の日本人参加者食事会にて

今回の留学を経験して、がん・生殖医療という新しい領域が発展していく上で我々のみならず、日本人皆に考えて欲しいと思ったことがあります。卵子をはじめとする donation、特別養子縁組、LGBT の問題ですが、日本ではアメリカではなんでも受けいれられていると錯覚されがちですが、私の実感では違います。我々と同じように彼らも葛藤を抱きながらそれらを受け入れる努力をしています。Oncofertility Conference の最終日に Woodruff 教授のホームパーティーに招かれた時に、ある先生からお互いに子供の写真を見せ合いながら話をする機会がありました。その先生は 3 人目のお子さんは養子であることを話されましたが、決して当たり前のことという雰囲気ではなく、その間に様々な葛藤を抱かれていただろうことがうかがえました。しかし、それでもお子さんを真の父として愛していらっしゃることが伝わってきました。「Try & Error」を恐れない勇気、100 点満点でなくても、よりよい社会を築いていく上での取り組みに試行錯誤しながらも前向きに進んでいく姿、この姿こそが今回の留学で私が最も学んだ貴重なものであったことを最後に記して私の報告を終わらせていただきます。

Woodruff 教授ご夫妻とのディナーにて

２０１６Oncofertility Conferenceに参加して

東京慈恵会医科大学　産婦人科学講座
杉本　公平
白石　絵莉子

２０１６年１１月１日から３日にかけて米国シカゴにあるNorthwestern大学で開催された２０１６Oncofertility Conferenceに参加してきましたので報告します。今回は１０回目の記念すべきConferenceでありました。日本からの参加者は岐阜大学産婦人科・森重健一郎教授、大阪大学小児科・三善陽子講師、聖マリアンナ医大産婦人科学・高江正道講師、中村健太郎先生、慈恵医大産婦人科・白石絵莉子先生、横溝陵先生、国立成育医療研究センター・心理士の小泉知恵先生、そして私の８名でありました。１日目の夕方には10th Anniversary Celebration and Welcome Receptionが催されました。Teresa K. Woodruff教授の挨拶、そして、何人かの方がご挨拶を述べられていました。横にあるスクリーンにはOncofertility Consortiumが開設されてからの業績が次々と流されていました。そこにはOncofertility Consortiumがこれまで行ってきた業績が論文を中心に次々と流されていました。１年あたりで１０枚以上は優にあったと思います。本当に偉大な業績を積み重ねてきたんだなあ、と感心してみておりました。その時に見覚えのある治療のフローチャート、しかも日本語のものが一瞬流れました。そう、私が昨年留学中にサイトの翻訳をしていた時に作成したものです。「あんな小さな私の仕事のことも覚えてくれていたんだなあ。」と心が温かくなりました。このConferenceに年々集まる人が増え、世界の注目を集めている理由、すなわち仲間の一人一人に心を配られるTeresa K. Woodruff教授の人柄の温かさ、を再認識できました。

日本人参加者と Teresa K. Woodruff 教授

私は１日目「Global Partner」のセッションで「Psychosocial Care for Oncofertility Patient in Japan」というタイトルで発表させていただきました。サイコソーシャルケア委員会の活動内容、そして、日本生殖心理学会がそのケアを担う人材育成、Oncofertility Psychologist をすでに１８人養成しており、Oncofertility Coordinator 養成の準備も行っていること、そして、JSFP は地域医療連携の中でその活用を目指していることについて報告しました。プレゼンを終えた瞬間は全体に少し唖然とした沈黙が流れました。結局聞かれたことは我々が作成した Web 上のコミックの作成料をどうまかなっているのかということと、Oncofertility Psychologist の養成プログラムの有無とそれを認定している組織はどこなのかということでした。あまり議論が盛り上がっているとはいいがたい状況でしたが、その理由はその後の議論の中で徐々に明らかになりました。岐阜大学の森重教授がポルトガルから来られたがん・生殖医療の中心施設でカウンセリングを行っている心理士の方に、「国内のどれくらいの患者を網羅できているのか？」という内容の質問をされました。その時の回答を聞く限り、施設に来るすべての患者にはカウンセリングを行う努力をしているとわかりましたが、国内全体を網羅しようという考えはないと感じました。国民皆保険制度のもとに全国どこにいても平等な医療が普及している日本に住んでいる我々と同じ概念は多分ないのだろうと感じました。それはきっと多くのほかの国の方も同様でしょう。我々のように、がん・生殖医療という先進的な医療を全国津々浦々にまで普及させようという概念は他国の人にとってユートピアのような話を聞いているのだろうと推察しました。どの国も各々のおかれた医療

資源、環境の中で精一杯の努力をしていることは伝わってきましたが、日本の目指しているビジョンはかなり先進的なものであると確信できました。（文責杉本）

サイコソーシャルケア委員会の白石と申します。私は、昨年に引き続き 2 年連続で参加させて頂きました。私は今回、2 日目のポスターセッションで発表をさせて頂きました。演題は「がん・生殖医療における特別養子縁組に対する認識調査」でした。日本では、米国で認められている卵子提供・精子提供・代理母などが厳しく制限もしくは禁止されております。自身の生殖細胞による妊娠が望めない場合、子供を望む際の選択肢として特別養子縁組があると思いますが、日本では特別養子縁組の成立件数も他国に比べて少なく、あまり積極的ではないといった現状があります。ではなぜ、日本では特別養子縁組が少ないのか、実際がんサバイバーの方々はそれについてどう考えているのか、情報提供は十分にされているかを調査しようと思ったことが今回の研究のきっかけでした。結果は、生殖医療医は特別養子縁組についてあまり知らないので十分な情報提供ができていない。サバイバーは、養子縁組についての情報が少なくよくわからない、血の繋がった子供が欲しい、養子を育てる自信がない、自分がサバイバーであるがゆえに子供を育てる自信がないなど、様々な悩みを抱えていることがわかりました。しかし、特別養子縁組を仲介しているエージェンシーのほとんどが、現在がんを克服し子供を養育できる環境が整っていれば、がんの既往が養親としての不適格基準になるということはないと考えているという結果でした。アメリカは子供養子大国でありますが、実はがんの既往があると養親として認められることはとても難しいそうです。それに比べ日本はがんサバイバーが養子を望んだ際に、縁組までの障害が少ないということがわかりました。私たちは、このことをサバイバーに伝えることによって、子供を持つことに希望と勇気をもって頂けると思っております。また、私たち生殖医療医がもっと特別養子縁組について学び、十分な情報提供ができるように啓発していきたいと考えています。

学会終了後に Woodruff 教授のお宅で開催されたホームパーティーにも参加させていただきました。医師だけでなく、心理士、ソーシャルワーカー、製薬会社、研究者など他業種の人が一つ屋根の下でお酒を飲みながら語り合う・・・映画でしか見たことがない光景でしたが、いろいろな職種の方の考え方を気兼ねなくお聞きすることができ、大変貴重な経験をさせていただきました。（文責白石）

Woodruff 教授宅でのホームパーティー

最後に今回のカンファレンス中には全米中を熱狂させる出来事がありました。それはメジャーリーグのシカゴ・カブスが１０８年ぶりに世界チャンピオンになったということでした。ご存知の方も多いかと思いますが、カブスが優勝できなくなった原因とされるある事件について改めて説明させていただきます。１０８年前にカブスが優勝を争っている時に本拠地リグリー・フィールドの前で居酒屋を経営している店主がその店のマスコットである山羊を連れて球場に入ろうとしました。いつも入れてくれていたのにその時だけ、臭いという理由で入場を断られたため、その店主は怒って「今後カブスがワールドシリーズに出ることはないだろう。」と捨て台詞を残しました。その後なんと１０８年確かにワールドシリーズに出ることはなかったのです。その呪いが破られたのがConference 期間中の１１月２日でした。１１月の３日には大のカブスファンである Woodruff 教授は朝の挨拶にカブスのユニフォーム姿で挨拶されました。

カブスのユニフォーム姿で挨拶される Teresa K. Woodruff 教授

そのほかにも、昨年 Woodruff 教授のホームパーティーでご自身の経験された特別養子縁組についてお話しくださり、深い感銘を頂いた Robert E. Brannigan 教授との再会、Woodruff lab の友人たちとの再会と心を躍らせることばかりでした。そんな中で日本のがん・生殖医療はしっかりと正しい方向へ進んでいることに確信を持てました。我々サイコソーシャルケア委員会の方で議論している案件の一つである特別養子縁組も含めた情報提供のあり方も多くの国が認識を共有していることも確認できました。

Brannigan 教授、森重教授と筆者

今年で３年連続の参加になりますが、がん・生殖医療の世界への普及は年々拡がりをみせており、さらに多国間での情報と認識の共有が進んでいることを実感することができました。最後に Northwestern 大学に留学中の聖マリアンナ医大・岩端秀之先生、慈恵医大・加藤淳子先生に学会中のディナーなどであらゆる面でお世話になったことにお礼を申し上げます。（文責　杉本）